荒野のコヨーテ

マイクル・フォックス●作
藤原英司●訳　ディー・ゲイツ●絵

国土社

訳者紹介●藤原英司

慶応義塾大学卒業。日本学術会議自然保護研連委員。エルザ自然保護の会会長。著書に「アメリカの野生動物保護」(中公新書),「世界の自然を守る」(岩波新書)「動物の行動から何を学ぶか」(講談社)「愛をもとめて動物たちと」(国土社)など。訳書に「野生のエルザ」(文藝春秋),「自然保護」(講談社),「野生の巨象」(朝日新聞社),「雪原のオオカミ」(国土社)などがある。

荒野のコヨーテ

文

マイクル・フォックス

絵

ディー・ゲイツ

訳

藤原英司

1984年11月5日初版1刷印刷
1984年11月10日初版1刷発行

発行者

長宗泰造

印刷所

厚徳社

発行所

国土社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17－6
電話＝東京943－3721
振替6－90631

〈検印廃止〉

NDC 933

フォックス, マイクル
荒野のコヨーテ　藤原英司訳
国土社　1984
158P　22cm

ISBN4-337-06220-3 C8393

荒野のコヨーテ

マイクル・フォックス作
ディー・ゲイツ絵
藤原英司訳

三土社刊

はじめに

この物語は、アメリカの西部地方にすんでいるコヨーテの話です。主人公はサンダンスと名づけたコヨーテです。

サンダンスのなかまが生活しているのは、ニューメキシコ州の東部やテキサス州の北西部で、半砂漠の荒れ地がひろがっているところです。ここはむかしゆたかな草原でしたが、今は低い灌木やわずかの草が生える荒れ地です。

その荒れ地に生きるサンダンスが、日常生活でであったさまざまな危険や苦労、そして生きるよろこびを書きました。

コヨーテの行動や心の動きを書くにあたっては、〝害獣〟というひどいことばの、ほんとうの意味がわかるように書きました。

コヨーテは人間をよろこばせるような動物ではないので、無法者といわれ、

人間たちによって追われ、苦しめられています。

けれどもサンダンスとそのなかまたちは、自然のなかのやっかいものではなく、自然全体のつりあいと調和をたもつために、なくてはならない生物なのです。

もし人間が自分自身をほろぼしたくないのなら、自然のしくみにかなった生きかたをするように努力し、自然とのあいだに、つりあいと調和をたもつようにしなくてはなりません。それには、人類だけではなく、動物たちの命と生きる権利についても理解し、尊重するひつようがあります。

これからお話しするコヨーテのサンダンスと、インディアンの少年ラフドの物語は、わたしたちが、緑につつまれた美しく輝かしい地球を守っていくためには、どうすればいいのかを、若いみなさんに考えていただきたく、その手助けとして書いたものです。

マイクル・フォックス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

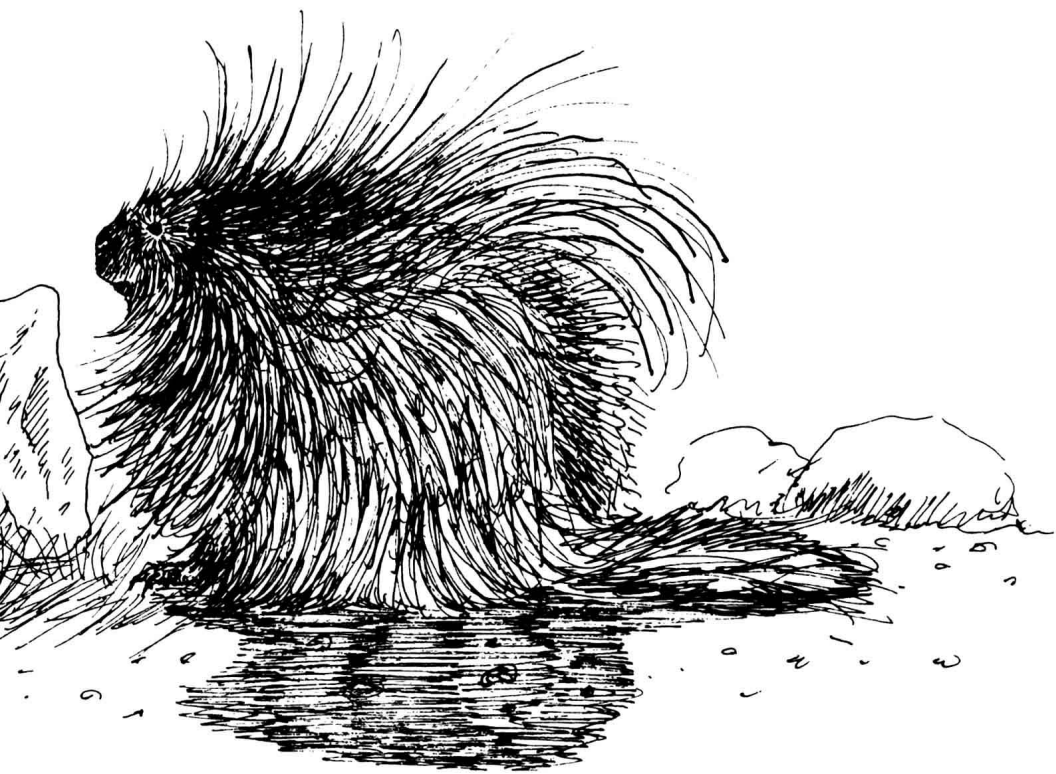
SUNDANCE COYOTE

Text Copyrjght © 1974 by Michael W. Fox
Illustration Copyright © 1974 by Dee Gates
Japanese translation rights arranged with
Dr. Michael Fox
c/o Blassingame, McCauley & Wood
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

荒野のコヨーテ

もくじ

はじめに 2
1 草原の死 8
2 日はのぼる 19
3 生きぬくために 29
4 ともに育つ子どもたち 43
5 なわばりのはずれで 55
6 コヨーテ対人間 74



7 命がけで走れ 93
8 サンダンスと少年ラフド 118
9 自由をもとめて 129
訳者(やくしゃ)あとがき 155

1 草原の死

サンダンスはおすのコヨーテで、アメリカの西部で、代だいくらしてきたコヨーテの子孫だった。

サンダンスの八代か十代前までのコヨーテの先祖たちは、じぶんたちがくらしている西部の平原が、もともとどんなすがたのところだったのかということを、だれも知らなかった。

コヨーテの寿命は六年から八年だが、生まれた子の半分以上は、最初の年に死んでしまう。

アメリカの大平原に、はじめて開拓者たちがはいってから、八十年以上たった。

開拓者がはいる前、大平原には、たけの高い緑の草が一面に生え、吹きわたる風にそよ

ぐ草のようすは、まるで大海原の波のうねりのように見えた。ゆたかな大地に、さまざまな種類の草が育ち、草の実をたべるいろいろな虫やネズミが、たくさんすんでいた。

大草原は、草をたべる動物たちもやしなっていた。たとえば、プレイリードッグという大きなネズミのなかまは、〝村〟とか〝町〟とかよばれる集団の巣をつくり、そのすみかは、何百万平方キロもの広い地域におよんでいた。

ソウゲンライチョウ、ジリス、ホリネズミ、ウサギ、アナグマもすんでいた。野牛のバイソンや、カモシカのプロングホーンの大群が草原に群れ、風にのって青空高く、マキバドリやツメナガホホジロが、歌声をひびかせながら舞いあがっていた。

バイソンやプロングホーンの群れは草をたべたが、おなじ場所に長くとどまっていることは、けっしてなかった。いつも少しずつ、ちがう場所へうつり、一カ所の草をたべすぎて、草原をあらしてしまうことがないようにしていた。

草をたべる動物たちは、自然のなかにすむ動物たちの一部で、ほかに草食動物を餌にする肉食の動物がいて、かれらも大草原をすみかにしていた。

植物をたべる動物たちのなかには小動物もいて、バイソンやプロングホーンなどの大きい動物といっしょに、あちこちうつって歩くことができない。その小さな動物たちも肉食の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

動物たちにくわれることで、数がふえすぎないようになっていた。

もし肉食動物が小動物をたべきれなかったりすると、小動物たちはふえすぎて草がたりなくなり、死んでしまった。つまり、さいごには大草原自身が動物たちの数を調節したのだ。

では、自然のつりあいをたもつ肉食の動物には、どんなものがいたのだろうか。

まず、たくさんの種類のワシやタカがいて、空からさかおとしにつっこんできて、獲物をするどいつめにかけた。地上ではオオカミの群れが草食獣の群れを追いかけ、年とった動物や病気の動物、それに弱い子どもの獣をたおした。

また、人間ではインディアンが、足のはやいウマにまたがって大きな獣を追いかけて殺した。だが、インディアンたちは、オオカミとおなじように、獲物を殺しすぎることはけっしてしなかった。もしそんなことをすれば、やがて獲物がいなくなってしまうからだ。

肉食の動物のなかには、小さい動物もいた。唾液（つば）に毒のあるジネズミ、アナグマ、スカンク、クロアシイタチなどだ。かれらは、昆虫や幼虫、ミミズ、ノネズミなどをとってたべた。

コヨーテもまた、そういう小動物を獲物にし、そのほか、オオカミたちのたべのこしたも

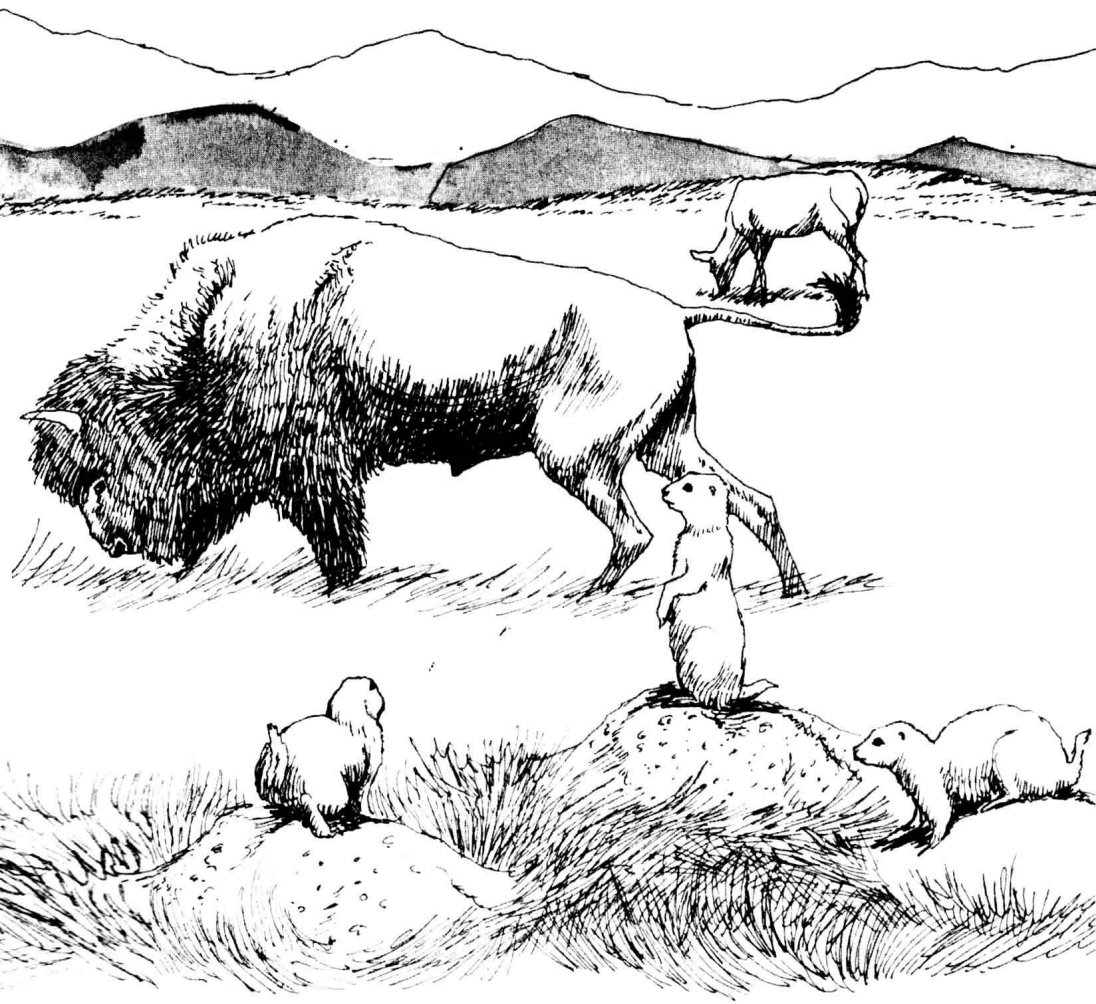
のも、かたづけた。コヨーテは死んだ動物もたべたが、おもなたべものは、なんといっても、足の早いジャックウサギだった。

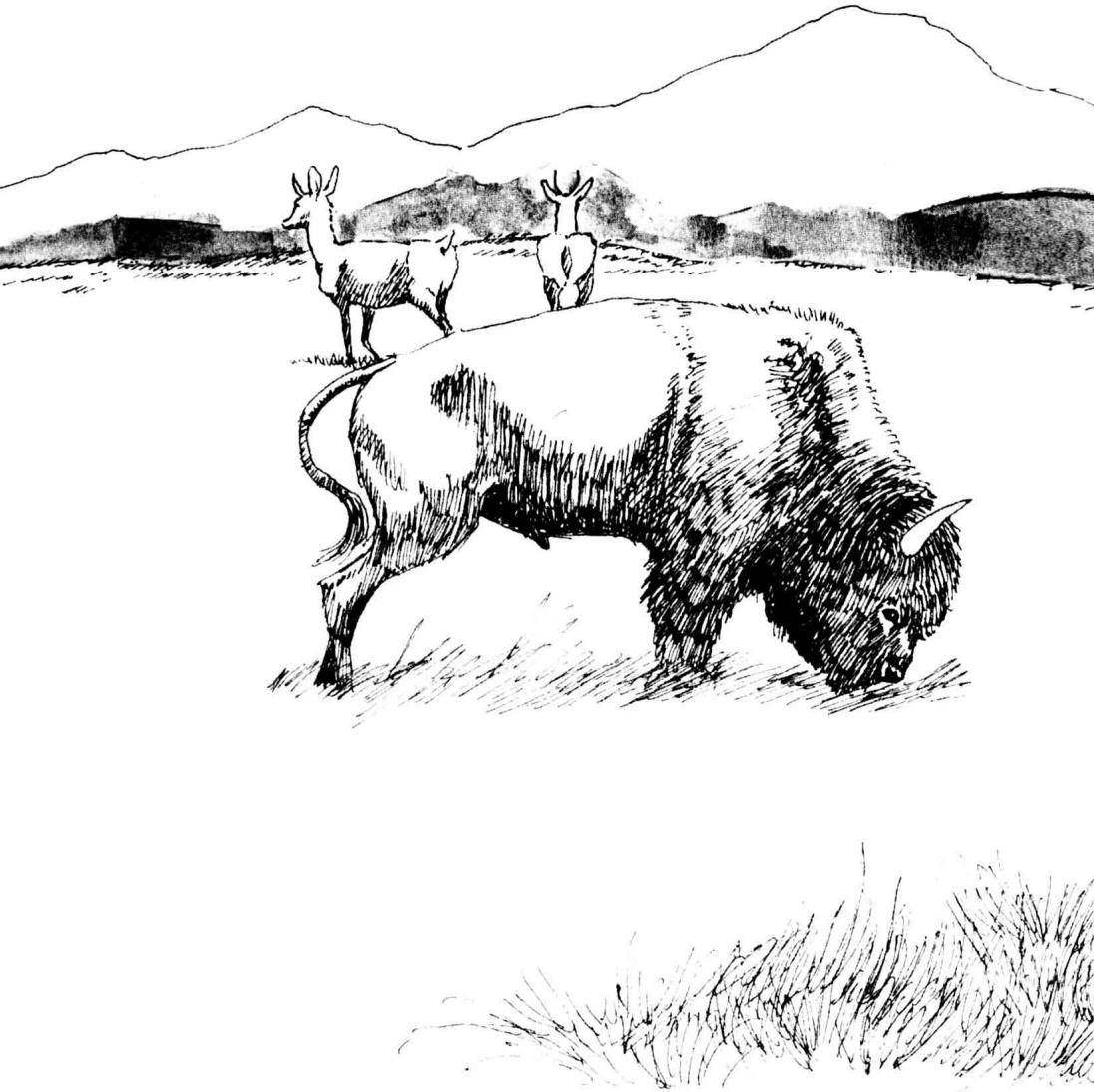
コヨーテは足が長くて胸があつく、走るスピードがはやくて、身のこなしがしなやかなので、たくみに身をかわして逃げるジャックウサギを、つかまえることができる。コヨーテは全速力で走るとき、時速六十キロものスピードをだせるが、そんなスピードで走っていてさえ、急にむきをかえ、じぐざぐに逃げるジャックウサギを、つかまえることができるのだ。

大草原はゆたかな世界だった。ネズミから野牛まで、草をたべる小さな動物から大きな動物まで、たくさんの種類の動物をやしない、オオカミやインディアン、コヨーテなどの肉食動物もやしなっていた。

そして、これらの動物たちと人間は、白人の開拓者がやってくるまで、みんなが、つりあいをたもって、いっしょにくらしていたのだった。

白人たちがこの大草原へおしかけていくようになったのは、いまから百年ちょっと前のことだ。はじめて大草原へはいった白人たちは、そこが家畜を育てるのにいい土地で、たがやせば穀物がよく育つ土地だ、ということに気づいた。





大草原にはヒツジやウシがはなされ、小麦やトウモロコシがうえられて、きゅうそくにすがたをかえはじめた。大むかしから大草原に育ってきた野生の草は、鋤でほりかえされてすがたを消し、かわって、何億トンもの穀物がとりいれられるようになった。

いままで野牛やカモシカたちがうろついていた平原では、家畜のウシやヒツジが草をたべ、まるまるとふとった。

だが、すぐに、ウシを飼う人びとと、ヒツジを飼う人びとのあいだで、争いがおこった。ウシもヒツジも草をたべるが、ヒツジは草を根もとまでたべるから、ウシよりヒツジのほうが草をだめにするというのだ。ウシを飼う人たちは、ヒツジが大草原をだめにして、むかしスペインや北アフリカでやったのとおなじように、せっかくの草原を砂漠にしてしまうと心配した。

だが、ウシもヒツジとおなじように草原をあらすのだ。すぐに、いままで大草原にいた野生動物たちのすがたがへっていった。かれらがたべていた野生の草が、なくなったからだった。

草原にはむかし、プレイリードッグとおなじくらい、たくさんのウズラがいた。しかし草原の草がなくなると、巣をつくるしげみがなくなって、ウズラの数はとても少なくなっ

た。だが、ハンターたちは、ウズラがへったのは、コヨーテのためだと考えた。

草原の野生動物がへったのは、人間の責任だった。たとえば、プレイリードッグは草をたべるが、人間はその草をじぶんたちの家畜にたべさせたかった。そこで毒をつかってプレイリードッグの〝町〟をやっつけだした。

コヨーテやアナグマ、ヤマネコ、キツネなど、たくさんの肉食動物が、プレイリードッグを餌にして生きていた。だから、人間がプレイリードッグをほろぼしてしまうと、多くの肉食動物が飢えて死んだ。

コヨーテやヤマネコのような大きな肉食動物は、なんとか生きのびることができたが、そのためには、ヒツジを新しい獲物として、餌にしなくてはならなかった。コヨーテがヒツジや子ウシを殺すと、人びとはコヨーテのことを〝殺し屋〟だといい、〝害獣〟だときめつけた。

だが、コヨーテたちは、インディアンとおなじように、ほかに獲物がなかったのだ。それでも、コヨーテは悪い動物だということになり、首に賞金をつけて、狩りたてられた。

はじめはいなかの罠師がコヨーテを狩り、のちには政府の役人がおそろしい毒をつかってコヨーテを殺しだし、その毒のために、アナグマやスカンク、ウサギ、鳥など、なんの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com